

「自己」を忘れて、「未知」を生きる

著者 湯浅和海

目次

まえがき

第一章 道元についての物語

- ◎ 「事実」ではなく「真実」を見る
- ◎ 道元を苦しめた「ある疑問」
- ◎ この世に存在する二つのタイプの「導き手」
- ◎ 道元が中国で出会った「真実の師」
- ◎ 「教師」と「師」の違いを理解する

第二章 「自己をならふ」際の二つの段階

- ◎ 本書における解説の方向性について
- ◎ 「自己をならふ」における二つの段階
- ◎ 「教師からは真理を学べない」と悟るまで
- ◎ 「師」を「松葉づえ」に変えてしまう人々
- ◎ 「孤独」の中で突然起こる「自己の確立」
- ◎ 第二段階は「責任感」と共に進んでいく
- ◎ 「覚醒」が十分に深まった時、「師」は現れる
- ◎ 「ディスプレイ」と「映像」を切り分ける
- ◎ 「ディスプレイ」に定まった時、「仏性」を知る

第三章 「自己」を忘れて、「生」を流れる

- ◎ 「絶対無」 Ⅱ 「絶対有」
- ◎ 「真理」とは、「究極の当たり前前」である
- ◎ 「仏性」に優劣は存在しないことについて
- ◎ 「自我」から「仏性」への軸足のシフト
- ◎ 「苦しみの受容」によって、「仏性」は表に現れる
- ◎ 「穏やかな解放感」の中で、人は「生」へと明け渡す
- ◎ 「大きな流れ」に巻き込まれて死ぬ人々
- ◎ 「深い呼吸」こそが、「万法」と共に在る証
- ◎ 「周り」に流されることなく、「生」に身を任せる

◎本章のまとめと、次章の予告

第四章 古今東西の「自己をわするる」

◎ここまでのおさらい

◎「自身の仏性」に納得できるまで修練する

◎「悟り」とは、「単なる思い込み」なのか？

◎「悟り」について「様々な仕方」で語る人々

◎ニーチェの語る「精神の三段の変化」

◎漱石が生きた「自己本位」と晩年の「則天去私」

◎野口整体に見る「独立心」と「天心」

◎合氣道に見る「自立」と「無心」

◎本章のまとめと、次章の予告

第五章 「未知」を生きる

◎「悟り」という「ゴール」が消えた後

◎「自由意志」と「運命」が重なる時

◎「明日をも知れぬ生」を生きる勇氣

◎「未知」の中へと足を踏み入れ、「運命的な偶然」を生きる

◎本章のまとめと、次章の予告

第六章 自分と他人を「自由」にする人生

◎「身体存在感」が脱落するまで

◎心と身体の大掃除

◎受け渡される「自由な心身」

あとがき

まえがき

はじめまして。あるいは、いつもお世話になっていますが、湯浅和海（ゆあさ かずみ）と申します。

本書は、日本における曹洞宗の始祖である道元禅師の「現成公案」げんじょうこうあん について、個人的に解説を試みたものです。「現成公案」とは、道元禅師が書いた『正法眼蔵』しょうぼうげんぞう という大著の冒頭の部分であり、ここに『正法眼蔵』のエッセンスが凝縮されていると言われています。

ただ、最初に断っておきますが、私は仏教徒でもなければ、仏教の学者でもありません。実のところ、『正法眼蔵』も読んだことがありません。それゆえ、もしもあなたが「現成公案」についての学術的な知見を得ようとしてこの本を試し読みしているのだとしたら、今すぐに本を書棚に戻してしまったほうが良いです。

私は仏教の正当な解釈というものを知りませんし、仏典もほとんど読んだことがあります。しかし、私はこれまでに十五年以上にわたって瞑想を実践してきた経験があり、最終的に、探求を続けた結果として、「悟り」というものを体験的に理解しました。それは、一言でいうと、「自分を縛るのはいつだって自分自身なのだ」という理解です。これについては、私のブログ (<https://purejoypath.net/>) の「連載記事」に詳しく書いていますので、興味のある人は読んでみてください。

ともあれ、私自身は正統的な仏教の教義を知りませんし、それを知ることあまり興味も持っていません。ただ、昔から「現成公案」の中のフレーズだけは、たまたま聞いて知っていたので、ずっと「どういう意味なのだろうな？」と思って考えていました。それで、先ほど言った「悟り」を体験してしばらく経ってから、不意に「ああ、そういうことだったのか！」と腑に落ちたのです。

でも、いったい何が「そう」なのでしょう？

この「そう」の部分と言語化することが、本書の目標の一つとなっています。実のところ、私にもまだ「全体の条理」が一瞬観えただけで、具体的に自分が何を理解したのかは、はつきり自覚できていないのです。

そういうわけで、この「まえがき」を書いている時点の私自身にも、この本の「全体像」は十分にわかっていません。「全体像」を直観的に把握しただけなので、「いったいどこがどうつながっているか」という詳細については、私自身も正確に理解していないわけです。

「そんな無責任な状態で解説を始められても困るよ」と言われるかもしれませんが、実のところ、今まで私が書いてきた他の本も、書き始めたことによつて後から「理」ことわりが観えてきて、最終的に思いつかない形で完成したものがかりでした。「実際に書く」というプロセスの中で思考が深まり、感覚が鋭敏になり、どこからともなくインスピレーションが降りてきました。それで私はいつも、「もともと書くつもりはなかったこと」を大量に書き続け、結果的に「何故か整合性が取れている話」を書くことになったのです。

不思議なことに、「直観」に導かれて行き当たりばったりで書いたはずなのに、出来上がったものは、きちんと「辻褄」つじつまが合っていたのです。

思うに、私たちの知性の使い方には二種類のものがあります。

一つは、「既知の情報」をつなぎ合わせるものです。これは、既に十分理解できている事柄を、パズルみたいにカチカチと組み合わせることで、何らかの理論や思想を構築するものです。この場合、その思考には「ライブ感」のようなものはなく、ただ淡々と知識を積み重ねていくような形になるでしょう。

おそらく、ほとんどのアカデミックな学術論文というのは、こちらの方法で知性を使い、書き上げられるもののではないかと思えます。書き始める前から、「全体の流れ」も「結論」もわかっっていて、全てを書き手がコントロールしながら、内容が出来上がっていくわけです。

それに対して、もう一つの知性の使い方は、「直観に導かれながら即興的に考える」というものです。この場合、当人はある時、不意に「全体」について理解します。それは「ビジョン」と言ってもいいと思います。たとえば、散歩している時とか、部屋でポケーっとしている時とかに、急に「全て」が観えてしまうのです。

「あ、そうか！」と当人は思います。でも、その「ビジョン」は一瞬で消えてしまうので、何が「そう」なのか、当人にもよくわかりません。ただ、その人の中には、「自分は一瞬だけど、全てを観た」ということについての、深い身体的な確信があります。そして、「自分は一体何を観たのか」を、その人は確かめたくなくなってくるのです。

それで、「ビジョン」を観た人は「自分が一瞬だけ観たもの」について、実際に何かを書いたり誰かに話したりします。そうして、この過程において、当人は「自分のビジョン」に導かれながら語るようになり、徐々に「自分が何を観たのか」を自覚できるようになっていくわけです。

しかし、これに対して一番目の知性の使い方、つまり「既知の情報」をただ積み重ねるような場合、当人は既にその道を歩き切っていて、どこに何があるかよくわかっています。だからこそ、詳しく描写することもできるわけですが、そこにはワクワクするような「冒険感」がありません。なぜなら、そこはもう当人にとって「歩き慣れた道」であるからです。

そして、そういう場合に当人は、かなり事務的に文章を書くことになるのではないかと思います。要するに、書いていても、面白くもなんともないわけです。

ですが、そういう「書き手のテンション」というのは、読む側にもダイレクトに伝わってしまうのではないかと思います。分厚い専門書なんかを読んでいると時々眠くなることがあります。あれは、そもそも書き手が事務的に淡々と書いていた結果だと私は思います。

逆に、二番目の知性の使い方、つまり、「直観」に導かれて書く場合には、当人はまだその道を歩いたことがあります。ただ、「全体の地図」だけは、脳裏にくっきりと焼き付いています。一瞬だけ観えたその「地図」が、ひとまず当人の足場になります。

そして、そこからこの「地図」を手にして、その人は「冒険」に旅立っていきます。自分が何に出会うかもまだ知らず、どこにどんな危険があるかもわかりません。それでも、その場その場で臨機応変に対応しながら、「地図に示された道」を手探りしながら進んでいくのです。

私は個人的に、後者の仕方では知性を使うほうが好きです。つまり私は、あくまでも「未知」に向かって即興的に考えることを好むのです。

逆に、「既にわかっていること」を何度も繰り返していると、私は自分の感受性が摩擦していくように感じて耐えられません。そこには「機械的な反復」が存在しており、もしもそれを繰り返し続けるならば、私の心は死ぬでしょう。

ということ、今回の著作も「地図は観えたけど、どうなるかはわからない」という状態で書き始めています。「無責任」に思えるかもしれませんが、私自身がワクワクしながら書いていないと、きっと読者もワクワクしながら読めないのではないかと思います。

いったい次にどんなフレーズが来るのか、私自身にもわかりません。それはいつも「今の瞬間」に生起してきます。だから私は、「考えながら書いている」というわけでもないのです。私はあくまで「どこかからやってきた直観的な閃き」に導かれながら、即興的に「踊って」いるだけです。筋書きはありませんし、演出も前もって決まっていません。

しかし、それにもかかわらず、なぜか出来上がった文章にはいつも「整合性」や「一貫性」が存在しています。これは自分でも不思議なのですが、私たちは「直観」に導かれて語っていると、なぜか「筋の通った話」ができるのです。

逆に、既存の知識をあれこれ組み合わせると、当人は自力で「辻褄」つじつまを合わせないといけなくなります。「整合性が取れているか」とか、「論理的な瑕疵かしが無いか」とかいったことを、絶えず気にしていないといけないのです。しかも、そんな風に神経をすり減らして語っても、大抵において筋は通っておらず、あちこちで話が矛盾していたりします。

これはまた本文中でも語ることにしたいと思います。私たちが「自力」で何かをしようとすると、だいたいにおいて、頑張っているにもかかわらず成果が出ません。

逆に、もしも「大きな何か」に導かれながら「他力」で前進していくと、なぜかそんなに「頑張っている実感」はないのに、大きな成果を出せてしまうのです。

それゆえ、私は「既存の知識」に基づいて「自力」で考えていくよりかは、「直観的な理解」に導かれながら「他力」で書いていくほうを選ぼうと思っています。その時、私は「自分自身で考える」のではなく、「降りてくる考えが通る通路になる」のです。

そんなわけで、私という「通路」の中を、道元禅師の「現成公案」が通り抜けた時、いったい何が生まれるのかについて、これから一緒に見ていきましょう。

結末は私もまだ知りません。なので、最後の瞬間までそれを楽しみに、ページを繰っていただく。

それでは、話を始めます。

第一章 道元についての物語

◎「事実」ではなく「真実」を見る

これから「現成公案」の解説に入っていく前に、まず、道元という人間について理解するところから話を始めたいと思います。なぜなら、彼がいったいどういう生き方をし、どんな問題意識を抱えながら道を求めていたのかを理解することが、結果的には、彼の思想の核とも言える「現成公案」について理解する鍵になると思うからです。

とはいえ、「まえがき」でも言いましたように、私は仏教学者ではありませんから、文献的なはつきりした裏付けがあるわけではありません。私の中にある道元に関する知識のほとんどは、OSHO^{オシヨ}というインドの覚者が講話の中で語っていた内容に基づいたものです。だから、道元の来歴について書かれた文献を読んで、歴史的な事実をきっちり検証したわけではないのです。

しかも、OSHOはけっこう「事実とは違うこと」を語ることが多く、彼の言うことを鵜呑みにすると、「誤った知識」を身に着けてしまうことがあります。OSHOが「事実関係」を重視しなかったのは、おそらく彼が「弟子を知的に満足させること」よりも、「事実を捏造して話をでっちあげても、弟子の意識を揺り動かして覚醒させること」を優先していたからだ、私自身は思っています。実際、OSHOの講話を聴いていると、次第に内側の思考が静かになり、心が落ち着いていきます。そのような講話には、OSHOの中を流れる「内的なリズム」が宿っており、それに同調することで、弟子たちは自然と瞑想状態に入ることができました。

それゆえ、OSHOは「学術的な厳密さ」を優先してしまうことで、「静寂のリズム」を壊したくなかったのでしょう。彼はあくまでも、弟子を「学者」ではなく「覚者」にしたかったのです。

それはともかく、そんなOSHOの講話が私の知識の元なので、そこにはおそらく「学術的な厳密さ」はあまりないと思います。

いちおう、ネットで調べられる限りの「裏」は取りましたが、文献を網羅的にチェックしたわけではないので、「間違っている部分」もあると思います。

ただそれでも、OSH Oが語った「道元についての物語」には非常に説得力があります。

そして、この「物語」は、歴史的な事実通りではないかもしれませんが、私がこれからこの本で語っていかうと思っている内容を理解する上で、鍵となる要素を含んでいるのです。

よって、私はOSH Oが語った「道元についての物語」を、「現成公案」を理解するための「方便」として利用することにしました。それが「事実」かどうかは重要ではありません。

私もまた、別にあなたを「道元の研究をする学者」にしたいわけではありません。私はただ、道元が「現成公案」の中で語っていることを、あなたが理解するための手助けがしたいだけです。

そして、その理解のための「舞台道具」として、「道元についての物語」は非常に有用であるのです。

ということ、ここから、「道元が悟りを得るまでの物語」を書いていきます。あなたには、「それが『事実』かどうか？」ということはいったん脇に置いてもらって、「そこに含まれている『真実』は何か？」という視点でもって、この物語を読んでみてください。

では、行ってみましょう。

◎道元を苦しめた「ある疑問」

道元は西暦1200年に生まれました。幼少期から非常に聡明だったようで、四歳の時点で漢詩を読み、十歳にもならないうちに『アビダルマ・コーシャ・バーシャ』という難解な仏典を、中国語から日本語に翻訳する作業に取り掛かっていたようです。まさに「神童」と言えます。

それゆえ、両親も周囲の人々も、「この子は今に偉大な人間になるに違いない」と思っていました。しかし、道元がまだ七歳の時に、両親はこの世を去ってしまいます。

一説では、父が三歳の時に亡くなり、母が七歳の時に亡くなったとされていますが、いずれにせよ、七歳の時点で道元は両親を失ってしまったのです。

このことを、道元の周囲の人々は「不幸なことだ」と言って嘆きました。「将来有望な神童」の未来が、このことによって閉ざされてしまったと思ったからです。

ですが、当の道元自身は両親の死を「好機」だと感じていたようです。彼は後年、弟子たちによく言っていたそうです。「私の両親はとても良い時に死んでくれた」と。

なぜ道元がそんな「無慈悲」なことを言っていたかという点、両親が早くに死んでくれたおかげで、彼は「親からの心理的な支配」を受けなくて済んだからです。

多くの人は自覚していませんが、私たちは大人になった後も、両親の影響を受け続けます。たとえば、当人の中では、「かつて父から告げられた言いつけ」が残響しており、知らず知らずのうちに、その人の言動を縛っていることがあります。また、人によっては母の面影を他人に求め続け、「自分を愛してくれる人」を探しては、その人から気に入られるように必死になっただけです。

こういった「心の反応」が起こるのは、私たちが無意識に「父」と「母」に寄りかかっているからです。そして、気づかないうちに、「父と母から気に入られる人間」を指して、その人は努力し始めます。これが間接的に絶えず当人のことを束縛することになり、結果、その人はいつまで経っても「自由」になれないのです。

まだ七歳だった道元は、このことが既に漠然とわかっていたようでした。「もう自分を縛るものはない」と道元は感じたのでしょう。そして、彼はそれまで翻訳していた『アビダルマ』の原稿を焼却し、出家する道を始めましたのです。

既にこの時点で、道元は「文字」の中に真理を求めることの虚しさに気づき始めていたようです。そうして後年の彼は、最終的に、「いくら仏典を学んでも無意味だ」と思い、「死んだ文字」ではなくて、「生きた師」を求めるようになっていったのです。

しかし、両親が亡くなった時点の道元はまだ幼く、すぐには仏教の世界から受け入れられませんでした。得度（出家する際の儀式や手続き）を受けるために、彼はそこから数年間待たねばならなかったのです。

道元が十三歳になった時、彼はようやく得度を受け、比叡山の僧となりました。ちなみに、この時から彼は「道元」と名乗るようになったそうです。ただ、それまでの幼名については諸説あり、正確な名前は明らかになっていません。

ともあれ、得度を受けて入った比叡山で、道元は公胤こういんという僧の元につき、大乘仏教や小乗仏教の教えに触れていきました。しかし、そうやって経文を読むうちに、道元は深い疑問に取り憑かれるようになっていきます。

それは、「なぜ悟るために修行が必要なのか？」という疑問です。

そもそも、道元が学んでいた経典には、「全ての人の中には『仏性』がもともと備わっている」と書かれていました。つまり、「人はもともと『仏』である」と書いてあったのです。

にもかかわらず、仏教の寺院では人々が絶えず「悟り」を目指して修行に明け暮れており、誰もが「仏性が見つからない」と言っては、道に迷っていました。そして、当時の道元は、そこに「矛盾」を感じずにはいられなかったのです。

それゆえ、道元は自分の師である公胤に尋ねました。「なぜもともと『仏』であるはずの我々に、修行が必要なのですか？」と。

しかし、公胤はこの問いに答えることができなかったようです。少なくとも、道元を納得させることはできませんでした。

きっと公胤もびっくりしたはずですよ。なぜなら、そんなことを質問した弟子は他に一人もいなかったからです。

誰もが「修行するのは当たり前だ」と思い込んでいて、それでいて、「我々はもともと

『仏』なのだ」と、思考停止したまま、実質の伴わない「お題目」として、これを唱えていたことでしょう。そんな中であって、道元はまっすぐに疑問を口にしました。「この教えは矛盾している」と、彼は師に向かって言ったのです。

◎この世に存在する二つのタイプの「導き手」

そもそも、この世には「教師（ティーチャー）」と「師（マスター）」という、二種類の導き手が存在しています。

「教師（ティーチャー）」は経典や自分の教師から教わった知識や技術を生徒に教えます。「教師」はしばしば膨大な知識や技術を身に着けていることがあり、生徒たちはそれらを教わって覚えることに必死になります。

そして、「教師」は往々にして、「自分の言っていることこそが『真理』」である。だから、自分に従いなさい」と生徒たちに言います。それを信じた生徒たちは、ますます必死になって「教師の言いつけ」を守り、なんとかして「教師」の教えに従おうとします。

これに対して、「師（マスター）」は、「出来合いの知識や技術」を学ぼうとするだけの「生徒」を相手にはせず、「弟子」になる覚悟のある人に向かって語ります。

そもそも「生徒」はあくまでも、「身に着けた知識や技術のカタログを長くすること」にか興味を持っていません。それゆえ、「生徒」は「自分のスペック」を磨くことを目的にして「教師」に寄りかかり続けます。

しかし、「師（マスター）」はそんな風に「弟子」が自分に寄りかかることを決して許しません。「教師（ティーチャー）」はいつも「あなた自身を捨てて、私に仕えなさい」と言いますが、「師（マスター）」は逆に、「私に決して寄りかからず、あなた自身に定まりなさい」と言うのです。

これこそが、「教師」と「師」との決定的な違いです。

「教師」は豊富な知識や技術を身に着けているかもしれないかもしれませんが、それらの知識や技術には本人の「血」が通っておらず、彼はそれらを生きていません。だからこそ、彼には知識や技術をパッケージして渡すことしかできず、それは結局、彼自身が他人から教わったことの「受け売り」でしかないのです。

逆に、「師」はしばしば知識や技術の豊富さの点で「教師」には負けますが、彼は自分の一挙手一投足の中に、それを表現することができます。彼の知識や技術は決して「死んだもの」ではなく、「誰かからの借り物」でもありません。それゆえ、彼はそうした知識や技術を自分自身で生きること、瞬間ごとに周囲に表すことができるのです。

「教師」は、自分の内側に「確かな核」がないことに、うすうす気づいています。彼は悟ってなどおらず、「悟った人々」の口真似をしているだけです。彼は「悟りについての知識」ならいくらかも持っています。悟りを生きることができていません。だからこそ、そんな自分の不安を埋めようとして、「生徒」たちに向かって、「私に従え」と言って、支配欲を満足させようとするのです。

もちろん、「見せかけの知識量」で騙せる「生徒」を相手にしているうちは、それでも問題ありません。問題が発生するのは、彼の前に「弟子」が現れた時です。

「弟子」は、「死んだ文字」を学ぶだけでは満足することができません。彼は既に、「いくら悟りについての知識」を頭に入れたところで、それによって『悟り』を生きられるようにはならない」と、うすうす気づき始めています。それゆえ、彼の問いは常に「根源的なもの」となり、「教師」の足元を掘り崩してしまおうのです。

「教師」たちは、知識だけが多いですが、「真理」については全くの「無知」です。そもそも、「無知」というのは、知識を集めれば克服できるものではありません。なぜなら、「無知」というのは、「自分はもともと『仏』なのだ」ということを、文献による根拠抜きに、自分の体験で確信できるようになった時、初めて消えるものだからです。

結局のところ、当時の道元に教えを授けていた公胤は、この世に無数に存在する「教師」の一人に過ぎませんでした。なぜなら、彼は道元の質問に答えることができなかつたからです。

道元は公胤に失望し、彼の元を離れていきました。せつかく何年も待って得度を受けたというのに、道元は「優秀な生徒」という地位を捨てて、「孤高な弟子」として、「真実の師」を求め、探求の旅を始めたのです。

◎道元が中国で出会った「真実の師」

公胤の元を離れた道元は、あちこちを彷徨さまよった末に、明全みょうぜんという禅僧の元で学ぶようになりしました。ちなみに、この時の道元は既に十七歳になっていたようです。明全は栄西えいさいという卓越した禅師の弟子だったのですが、どうもこの明全も「師」ではなくて「教師」だったようです。

実際、道元は明全の元で学んでも満足することができませんでした。彼の中にはまだあの疑問、「なぜもともと『仏』であるなら、修行が必要なのか？」という疑問が残っており、彼のことを悩ませ続けていました。そして、明全もまた、彼のこの疑問を吹き消してやることができなかつたのです。

道元が二十三歳の時、彼と明全は共に、博多から中国（当時の南宋）へと渡り、そこで

「真実の師」を求めました。道元は最初、景德寺という寺で住職をしていた無了派むざいりょうはという僧の元で学びました。無了は道元のことを認め、何度か印可いんか（「悟った」という証明）を示したのですが、道元はこれを辞退しています。おそらく、彼の中の疑問、「なぜ悟るのに修行が必要なのか？」という問いが、この時もまだ消えていなかつたのでしょう。

その後、道元は無了の元を離れ、さらに多くの寺を巡って「師」を求めたようです。しかし、結局、「出来合いの教え」を口真似する「教師」しか見つからず、「真理」を体現している「師」には出会うことができませんでした。

それで、もう諦めて日本に帰ろうとしていたその時、中国にわたって最初に学んでいた無
際了派が死去し、天童如浄てんどうにょじょうという僧が後継者になったという話を、道元は耳に挟みました。

この如浄という人は「極めて優れた禅師である」と評判になっていたようです。

それで道元は、「これで最後だ」と思って、如浄の元に行きました。そうして道元は、如浄
に自分の長年の疑問をぶつけたのです。

「なぜ『仏』であるはずの我々に、厳しい修行が必要なのですか？」と。

すると如浄はこう答えました。

修行は一切必要ない。なぜなら、お前は「仏」だからだ。

それにもかかわらず、お前が道に迷っているのは、

お前が「自分自身」以外のあらゆるところを、探し回っているからだ。

「外側」に教えを求めるな。ただ、黙って「内側」に入るのだ。

この言葉を聞いた時、おそらく道元は如浄が嘘を言っていないと直感したはずです。「口から出まかせに經典の受け売りをしているのではなく、この人は本心でそう思っている」と、道元は気づいたことでしょう。

そして、彼はそれ以上、外側に「教え」を求めることをやめました。彼はそのまま如浄の元に留まり、それ以上、もう疑問を口にすることなく、黙って坐り続けたのです。

そうこうするうちに、如浄の中に在った「静寂」が、道元を感化し始めました。道元の内側は次第に静まっていき、彼は「自分自身」に定まり始め、そうしてある時、その「自分自身」さえもが落ちたのです。

彼はその状態のことを「心身脱落」と言っています。この「心身脱落」という言葉自体は、もともと如浄の語ったものだったようですが、道元はそれを「自分の体験」を通して理解できたのです。

道元の中から迷いと疑いが完全に消えたことを察した如浄は、黙って坐り続ける道元のことを打ち、こう言いました。

もうこれ以上、「弟子」の振りをする必要はない。お前はもう悟った。

だから、ここに留まっている必要はない。

ここを出て「自分のいるべき場所」に行くがいい。

そして、今後は暗闇の中を迷う「無知」な人々に対し、慈悲深く生きることだ。

道元はこうして日本に帰ってきました。

そして、中国で学んだ曹洞宗を日本に広めた第一人者となったのです。

◎「教師」と「師」の違いを理解する

これが、私がかつてOSHIOから聞いた「道元についての物語」です。

おそらく、ここにはOSHIOによる「創作」も含まれていたでしょう。でも、先ほども書いたように、大事なことは『「事実」かどうか？』ではなく、「私たちの理解を助ける『真実』が含まれているかどうか？』です。

道元は、その探求の過程で「師（マスター）」を探し続けました。「真理について口にする人」ではなく、「真理を我が身で呼吸する人」を、彼は探していたのです。

そして、これから私が解説しようと思っている「現成公案」を理解する際にも、この「教師（ティーチャー）」と「師（マスター）」の違いをよくよくわかっていることが必要になります。

もし「教師」しか理解できない「生徒」のままであれば、その人は「現成公案」を理解することはできないでしょう。「現成公案」を本当に理解しようと思ったら、どうしても「教師」ではなく「師」について理解する必要があります。

「それはいったいなぜなのか？」については、また次章以降に説明していこうと思います。今はまず、「教師」と「師」は全く違うということ、そして、過去の道元が「教師」を渡り歩いた末に「師」と出会ったことを、頭の片隅に置いておいてください。

この章はこれで終わります。